特別
～4
8138

貴
14
8138

<2007－140>

勅にて代々集のあつめらるゝくせある也 口傳

# 新古今和歌集巻之第一

## 春哥上

はる立心をよみ侍る

摂政太政大臣

みよしのは山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり

古今 後撰 拾遺 三代集をは当時の哥ともあつめられ又後拾遺 金葉 詞花 千載 この四代集は当時の哥ならびにこの新古今あつめきこえ集のうちにとりて新古今と名はつけられより巻頭の哥にやすらかにあつめらるゝ也し

春のはじめのうた

太上天皇

ほのぼのと春こそ空に来にけらしあまのかぐ山かすみたなびく

かぐ山の春のけしきなるへし かく山のかすみたなひくをほめていふ也

百首哥たてまつりし時

式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかゝる雪の玉水

山家なれはすこし春の来るもしられぬ也

五十首哥たてまつりし時

宮内卿

かきくらし猶ふるさとの雪の中に跡こそ見えね春は来にけり

雪中に人のとはぬを跡のきゆる也 我身の雪の跡なし

入道前関白太政大臣右大臣に侍りける時百首哥

よませ侍りけるに立春の心を

皇太后宮大夫俊成
けふといへはもろこしまても行春を都にのみと思けるかな

題しらす
俊恵法師
春といへは霞にけりな昨日まて浪まにみえし淡路島山
昨日まては浪まにみえしか今日は霞て見えぬとなり
ふかく思ひいれたる哥也

春の哥とてよみ侍ける
西行法師
岩まとちし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらん
とちこめしこほりのとけて苔の下水のみちもとむらんやうなる

よみ人しらす
風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たなひく春は来にけり
しかすかにといふはさすかにと云し風ませに雪はふりつゝさすかに春
あれは霞たなひくとよめり

時はいまは春に成ぬとみ雪ふる遠山のへに霞たなひく
心あきらかなる哥なり

堀川院御時百首哥奉りける時残雪の心を
よみ侍ける
権中納言国信
かすかのゝ下もえわたる草のうへにつれなくみゆる春のあは雪
下もえわたるとは火のえんし春上につれなき雪し

題しらす
山辺赤人
あすからは若なつまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ
春のはつかにてよめし

天暦御時屏風哥

春のくまいでより成りわるまもなれば
　　寺法院　三百首寺
みるつゞ神ともいわう
　　延喜清河の扇風
　　壬生忠見
　　前参議教長
　　紀貫之
　　速振百首寺
　　皇后宮寺後成
　　和寺にて同路
　　太上天皇

堀川院ニ百首ノ時雪ノ心ヲ

源仲實朝臣

春ニテ雲ヲ

春ノ杜ノウツロフ淺雪ソヨフ

題不知

中納言家持

春雨ノヒトモトヤナキウツロヒヌ

小杜ノウツロフ雪ソヨフ

ヨミ人知ラス

文ニ雪ヲ

ヒトハノミ雪ト成ル梅花

家ノ百首ニ合セラレシ雪ノ心ヲ

權大納言長家

雪ヲ花トミルニ

ミヨシノノ山ノ白雪ツモレハヤ

和哥所ニテ雪ヲ

春ノ來ル月トヨリ

越前

山ノ雪ヲ

春ノ月ヲソヘテヤ雪ノ

詩ヲツクリテ雪ヲ

合セラレシニ

左衛門督通光

[illegible]

有明の月

[illegible]

春の雪

[illegible]

梅

[illegible]

梅

[illegible]

山色

[illegible]

梅

[illegible]

百首哥

[illegible]

惟明親王

[illegible]

志賀寺上人

[illegible]

百首哥をめしまつりて

あさの原ふもとの柳かきみだれ
　ものうき今朝の春の雨かな　前大僧正慈圓

崇徳院に百首哥たてまつりける時

あさぢふのをのの篠原風さえて
　もの中ならしかの声ぞする　左京大夫顯輔（キヨスケ）

暁雪といふことを

ひさかたの雲のかよひぢ吹とぢよ
　をのの通ひのしばしばかりも　皇太后宮大夫俊成（シュンセイ）

詩を

太上天皇

ふるさとを心にかけてしのぶ哉
　花ももみぢもむかしなれども

百首哥たてまつりける時

桜咲ぬ山下風にあとたえて
　こずゑにのこる花のしら雲　藤原家隆朝臣

守覚法親王家にて哥たてまつりけるに

藤原定家朝臣

千五百番哥合　　右兵衛督通具（ミチトモ）

梅花　うす紅梅　匂

皇太后宮大夫俊成

梅花　よそへて

大貳三位

梅

春とだに　（ナシ）

二月雪

大貳三位

康資王母（ヤススケノミコトノハハ）

梅

梅ちるや　ことの

ことづて　梅さそう

百首哥合　春二

千五百番哥合

式子内親王

内親王御家(ヒ)の
のうりやうにて
春門院小宰相
梅
ちる雪に匂ひを梅に
移りて
ひとりのこりておもひ我
匂ひをうつすうつすと
文集(カレウ)白陵(ハクレウ)春夜詩
ことをよく
思ふ
大江千里
月
おもひ

寂蓮（ジヤクレン）法師

里はあれてそのむかしの打尾あれ月よのゆめの空

そのむかしのかりはそのあれたるしのふるけれとかりし名はと
仲也

列君頼輔歌合に 後けるに 続くつらね

皇太后宮大夫俊成

雁人そなたさはかりなれはてかりて行すゑの雲の空

あまの原かりはまたいつ申すそのかりかくすくなる也秋の
おもはてたまかは哀あはれなり

題不知

読人不知

あはれまつかりのゆきさよふけて雲路にまよふ声すなり

帰雁と

摂政太政大臣

忘るなよたのむの沢をたつ雁もいなはの風の秋の夕暮

百首歌奉りし時

梅ちる里は人の心にまかせて月と花との名こそ惜しけれ

里はの里といふ庭さひしき月と花とおもしろきをもてそへたるは月花の名おしきと也

守覚法親王家五十首歌に

藤原定家朝臣

霜まよふ空にしをれし雁かねのかへるつはさに春雨そふる

閑（カン）中（チウ）春雨といふことを

大僧正行慶（ギヤウケイ）

つくつくと春のなかめのさひしきはしのふにつたふ軒の玉水

つくつくとはしみしみと也 春のなかめとは雨也 しのふとは草也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

伊勢

百首寄春雨

橋政大臣

雨重し小田のすがをの玉苗もまだうゑやらぬ山のかひかな

晴命法師

雨ふりて雨中苗代といふことを詠る

延喜御屏風

凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳の糸のみどりぞ深くなりける

大宰大貳高遠

打なびく春の柳の糸ごとに玉ぬきかくる雨のしらつゆ

補仁親王

雨中柳を詠る

春雨のふるにつけてぞ青柳の糸のみどりぞ深くなりける

百首歌中

崇徳院御製

あしひきの山のしづくにいとどしく濡てそほつる春の柳は

この歌はしづくにぬれてそほつるといふ事を詠ずるなり

柳の糸は水のうへにうつりてそのかげもまた水にそほつるやうにみゆるなり

とよのあかりの節会の日まゐりて侍りしに川のほとりの柳を

建仁元年三月尽奉

このくさのことばを二あまりいつもの人のこころにおもひよせつつ
よめるなり　　西行法師

よ数山桜の枝に雪ふりてつもるにおどろく花のかげかな

白川院うせおはしましてのち、ほどなくかの御ぐしおろしたまひけるころ

桜花さくをみつつもいとまこひしたまひけるころ

亭子院亭合のころ　　紀貫之

ちる心ありてさくらのさくにあくがれまどふ春の心を

権政大政大下家百首奉りし時　　藤原家隆朝臣

思ふこと言ひもはてぬに散る花を誰がいなりと問はましものを

百首奉りしに　　藤原家隆朝臣

春ごとにながめてすぐす年月を花に問はばや世々の古人

述懐　　式子内親王

ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

中納言家持

ゆく人もとまる人もおほつかな春の山ぢのかすみわかれに

ゆんでえんでかへんて花をみよう雪

花のさそてよこねるう

よ時山そのさかりのうつくしきをいふの詞なり

西行法師

和寺所にて寺つくるまつほ春のくれ

寂連法師

うつさや雪の外桜さきにけり白雲

この寺多く植えるやうにしかしこの寺のほりもの

今さかりと言ひしをもやまいうきて花の

さかりにいたりしをいふ

そつらん

後人

磯上ふる紀寺にて

破のこりいふかしき寺とも

春のくるいかなる竜の出てかは

心いかなる人の笛にて

八重桜をおりて人のつとにせよ

源公忠朝臣

道命法師

ちるをうらみちらぬをもかこちてわけ来ハ

百首寺にて

ちるものとしらでや人をまちけらん

花のさかりに京へ上りて

花山院家朝臣

新古今和歌集巻第二

春歌下

贈阿和尚歌

山のさくらさきぬる

太上天皇

桜さく遠山鳥のしだり尾の

ようさのように後成の

とあそばしたるも此歌也

千五百番歌合

同 左 大将後成

いくよ春のまにかと思ふ

ありそ海の

百首歌

式子内親王

ふるさとの花の

あまさかるとは京をいふ

天庭ト云

頌歌

百寮の上つ人さへ

もゝしきは内裏也百官の座あるゆゑにかく云也

玉葉集



内大臣

桜さく時望山路を後

京極前太政大臣

花のえにさく春雨

百首歌

祐子内親王家

ふるさとの山桜いかばかり

人こゝろのうつろふ

権中納言長家

花の色は

百寮の上つ人さへ桜花

玉葉集

菅原家隆朝臣

[illegible]

みやこのつとめて桜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鷹のうつる風やはそ色もみぢの花をおもふ

百首歌めし、河もあまたのむらむれのうつりのようえんにそそぐ也

源具親（トモチカ）

見し花（ハル）のこころをうつす水のもにみてもあかぬ堀川院の時百首奉れる

大納言経信（ツネノブ）

春の山のこずえのみ風うすくれなゐにうつる

大納言師頼（モロヨリ）

花ぞ散る雲ぞ霞（カス）のたえまなる春の山のこずえのみ風うすくれなゐにうつる

大納言師頼（モロヨリ）

花ぞ散る雲ぞ霞（カス）のたえまなる春の山のこずえのみ風うすくれなゐにうつる

左京大夫顕輔（アキスケ）

うすくまでもの八重桜ちるをすいかるものとそやまと

新院位の時

崇徳院（スウトクイン）

花ぞ散る雲ぞ霞（カス）のたえまなる春の山のこずえのみ風うすくれなゐにうつる

刑部卿範兼（ノリカネ）

花ぞ散る雲ぞ霞（カス）のたえまなる春の山のこずえのみ風うすくれなゐにうつる

越前

山の庵（イホ）のこずえのみ風うすくれなゐにうつる

五十七 奉志中湖上夏

夏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

殿御門院大納
千五百番歌合
左近中将良平
藤原雅経
太神宮百首奉納
太上天皇

曲水宴（エン）とあり

中納言家持

坂上是則（カノウヘノコレノリ）

良暹法師（リョウセン）

寂蓮法師

権中納言匡房（キョウフサ）

参議雅経

権大納言

菅原家隆朝臣

吉野の岸のこずえさびしく
（ゆふぐれ）
こゑあてゝ打ちうつ砧
堀河院の時百首歌たてまつりける時
秋中納言國信
延喜十三年亭子院歌合に
菅原輿風（シキナ）
吉野の山風の寒く吹くなへに
（ふもと）
麓の里ぞ衣うつらし
延喜御時
赤人
ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる
清き川原に千鳥しば鳴く
天暦の御時歌合に
（ひとよ）
一夜ねし旅の衣の袖だにも
乾あへなくに明くる頃かな
（かわ）
ましてや涙の
ましてやまさるあま衣
天暦御時
紀貫之
清滝川（ヒヨドリ）
音羽の山に秋風の

宮内卿

来ぬとさすやり歌のもとはおほくきこえけれともたかき世に

百首歌にてよみけれ

摂政太政大臣

ゆるさるゝ志の花園まれはてぬ跡ははるかに人きこえの花

新古今和歌集巻第三

夏歌

題しらず　持統天皇御歌

春過て夏来にけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山

これは春過て夏来にけらしといふ心は白妙の衣ほすといふは[illegible]
[illegible]夏衣をほすといふ山てあまのかく山[illegible]
[illegible]天女の衣[illegible]
[illegible]
[illegible]

素性法師

惜めとも止らぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな

更衣のよしかん物なり

おそくものけきまあ
きをそうてはるか
なたにていくそ成あ
夏のそらめもくそてよみ給ふ
源道済
わそらともまいう成世
世とのやくまをうをうの
卯花月といふ心をよみ侍ける
白河院の御
卯花のしらきは垣のあ
いうらす
大宰大弐重家
ほの見しあけの時しも夏
浪のてゆうそうそう
前院御うの時神
忘のやあらひをまよ
神館也神ともそ云
神をいはひまつりて
弐条院
参えまう
小侍従
その神山にあり神山
毎年三度二度

宝積院より百首寄
待賢門院安藝
栖あさの下葉も霜の
そめつらす
もりもり庭の
かりふすとこそ人の絶
菊茶（モト）ナナ
夜草
人やらんとまつ
延喜御時の
柿本人丸

ゆかりの片岡の梢をかしくみえ侍けれハ

紫式部

郭公声待ほとハ片岡の森のしつくに立やぬれまし

片岡の森ハ名所也やそこ加茂の社の森也

かもにまうてける暁時鳥のなきけるをきゝて

弁乳母（メノト）

時鳥み山いつなる初声をいつれの里のたれかきくらん

読人不知

五月やま卯花月よ時鳥きけともあかすまたなかんかも

その妻恋つゝや鳴五月やミ神なひ山の山ほとゝきす

神なひ山 神なひとハ神のおはします所をいふ
男女のならひにそへてそのつまこひつゝやとよめり

中納言家持

郭公一声きてあかよハいつれ人のいつ代やまたん

大中臣能宣朝臣（オホナカトミノヨシノフ）

時鳥鳴つるかたのいつもあし我もまさりて出まさるかな

大納言経信（ツネノフ）

二声と鳴ときゝなハ時鳥衣かたしきて猶ねさらん

待客聞郭公といへる心を

白河院御製

時鳥また打とけぬしのひねハこぬ人をまつ我のミそきく

題しらす

花園左大臣

きかてたゝねなましものを時鳥なか〳〵なれや心つくしに

神名ちすてかくまをすを
弁覚ゆきの移を附る
入道前関白右大臣
ひと巻の書ゆの雨と海ふそくと山ほととす
雨そくく毛橋ト風ふそくと山ほととす
この下脱也と云、かるそけうう寺ハよあしと山まり

前中納言(二サ)定房
月入桂のすゑ小嶋也
百首寺まで
皇太后宮大夫俊成
(ナカミ)
お摸
きうそくと移ゆまを附る中くゆまやまのまり
(ムラサキニキフ)
紫或ア

郭公
(スワウノナイシ)
周防内侍

雅行と申やうと郭公の絵を俺ゆる
宣旨八年お大殿下ト陽院寺合ト
附るを
(アセテトヨ)
侍ふる
海ふ時鳥と云事を
(キニテフ)
使ふ通
(アセンニトハヨニ五)
枕案
(ノリミツ)
百首寺ふれ中ト
民ノ部元
二拝ときすハそて附ふ
なくまの民ハ雨ひおそふ山ほととす
郭公ととよる
八條院高倉

一声はおもひそあへぬ時鳥たそかれ時の雲のまよひに

千五百番哥合　摂政太政大臣

有明のつれなくみえし月はいてぬ山時鳥まつ夜なからに

後徳大寺左大臣家に十首哥よみ侍けるによみてつかはしける　皇太后宮大夫俊成

我心いかにせよとて時鳥雲まの月のかけに鳴也

郭公の心をよみ侍ける　前太政大臣

時鳥なきているさの山のはゝ月ゆへよりもうらめしき哉

権中納言親宗（チカムネ）

有明の月はまたぬにいてぬれと猶山ふかき時鳥哉

杜（モリ）郭公といふことを　藤原保（ヤス）秀（ヒデ）朝臣

過にけり信（シノ）太（ダ）の杜の時鳥たえぬしつくを袖にのこして

百首哥たてまつりし時　式子内親王

声はして雲ちにむせふ時鳥涙やそゝくよひのむら雨

むせふとは志ふかき心也

題不知　家隆朝臣

いかにせんこぬ夜あまたの時鳥またしと思へはむら雨の空

いかにせんこぬ夜あまたの時鳥待へきにもあらすまたしと思へはむら雨の空なり　これも哥也

千五百番哥合　権中納言公経（キンツネ）

時勘申
西行法師



山家暁郭



法性大寺左大臣



権政大政大臣



皇太后宮大夫俊成



大納言經信

[illegible]
[illegible]
[illegible]

雨中木繁（シゲシ）といふところを

藤原基俊（モトトシ）

玉かしハ茂りにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで

葉守の神とハ木の主木をまもる神也

百首哥よませ給けるに

入道前関白太政大臣

五月雨ハおふの川原のまこも草からでや波の下に朽なん

おふの川原名所也 又一条おほまる川原と云説

五月雨乃心を

藤原定家朝臣

玉ほこのみちゆく人の云傳もたえて程ふる五月雨の空

荒木田（アラキタ）氏良（ウヂヨシ）

いせの山田宮氏也

さみだれの雲は晴ずとあかつきの空より西に月を待かな

常よりも月ハひかり也 [illegible]

百首哥奉し時

前中納言忠良（タヾヨシ）

あふちさくそとものこかげ露おちて五月雨はるゝ風渡る也

この哥ハまへの雨そゝく花橘に風過て山郭公雲になくなりといふ哥の心を引かへて上手の哥也

五十首哥奉し時

藤原家隆朝臣

さみだれの月ハつれなきみ山よりひとりもいづる郭公哉

太神宮へ奉し夏の哥中に

太上天皇

時鳥雲井のよそに過ぬ也晴ぬおもひの五月雨の比

[illegible]

[illegible]

建仁元年(サツキ)五月廿日
[illegible]

二條院讃岐(サヌキノ)

題不知

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

右衛門督通具(ミチトモ)

[illegible]

式子内親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

郭公花たちはなのかをとめてなくはむかしの人や恋しき
続きそへハむかしそて也上略し

皇太后宮大夫俊成

橘のにほふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖のかそする

藤原家隆朝臣

ことしより花さきそむる橘のいかてむかしのかににほふらん

守覚法親王五十首哥よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

夕暮はいつれの雲のなこりとて花たちはなに風の吹らん
雲となりしを思ひ出れと終日吹つゝて夕暮と云も吹風と
云て打雲の名残そてと吹人にあ也らもて云さとりへし
又昔とむかしの人の名残ともよむ也云ても むかしと思ふる
夕暮の風もふくそむかしの人と思ふをはいひはなる哥也秘说し

花橘にほとゝきすの鳴わたりけれは

増基（ゾウキ）法師

かをるさへ付も橘のかをりにすくやむかしの人の名残なるらん
橘のかをりとハかくいへりと末句也

堀川院御時きさいの宮にて閏（ジユン）五月郭公といふ心を人々つかうまつりけるに

権中納言国信

郭公さ月みな月わきかねてやすらふ声そ空にきこゆる

題不知

白川院御哥

庭の面は月もらぬまて成にけり梢に夏のかけ茂りつゝ

恵慶（エキヤウ）法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

窓近き竹の葉すさふ風の音にいとゞみしかきうたゝねの夢

すさふはすさましきにてはなくてすさむ也すさむはもてあそふ也
まとり

鳥羽殿にて竹風夜涼と云ことを人々つかう
まつりけるに

春宮権大夫公継

窓近きいさゝむら竹風ふけは秋におとろく夏の夜の夢

夢さめて秋そとおとろきつるよし也

前大僧正慈円

むすふ手に影みたれ行山の井のあかても月のかたふきにける

山の井とはあさき所に抱たる水也　山井はあさけれはあかてとよむ也

最勝四天王院の障子に清見関かきたる所

右衛門督通光

清見かた月はつれなき天の戸をまたてもしらむ波の上哉

短夜の心なるへし

家百首歌合に　摂政太政大臣

重ねても涼しかりけり夏衣うすき袂にやとる月影

夏衣とうすきは涼しかるへきを月とやとれは猶涼しき也

摂政太政大臣家にて詩歌を合せけるに　水辺冷自秋と云事をよみ侍りける

有家朝臣

涼しさは秋やかへりて初瀬河ふる川のへの杉のした陰

ふる川のへの杉の下陰は秋やかへりきたるとよむ也
秀句也

題しらす

西行法師

崇徳院

百首歌

たのめつゝ来ぬ夜ある夜を思ふらむ
あらいふ事を聞くぞ悲しき

千五百番歌合

旅宿清輔朝臣

雲晴(ツレ)て夜半の月影冴(サヘ)ぬれば
袖中納言(ソデチウナゴン)成(ナル)

源俊頼朝臣

夜月(ヨツキ)とともに行(ユク)
夜の間を待(マツ)ともなくに明(アケ)ぬるは
いかなる事ぞ問(トヒ)ぬべきかな

百首歌の中に

久方の雲ゐの月を見る夜しも
秋の大納言忠良(タヾヨシ)

百首歌たてまつりける時

藤原定家朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今和歌集巻第四

秋歌上

中納言家持

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし
百代の旅も我がごとやあらむ

崇徳院御製

うつせみの世にも似たるか花すすき
ほに出でて招く袖と見ゆれば

菅原孝標女

この秋ぞ世にふる甲斐はありける
いかに契りし露の命ぞ

一条摂政御集

秋の野の草の袂か花すすき
ほに出でて招く袖と見ゆらむ

あはれ又いかにしのばむ袖の露野原の風に秋は来にけり

あはれ又とは去年の秋もしのびしに又いかにしのばんとなげきし也

源具親（トモチカ）

しきたへの枕のうへをすぎぬなり露をたづぬる秋の初風

しきたへは常住也 秋風は露を尋ぬるやうにて我涙に吹来ると云事也

顕昭法師（ケンセウ）

[illegible]

[illegible]

越前

[illegible]

藤原雅経（マサツネ）

[illegible]秋のくれ

[illegible]下荻の末こす露に[illegible]風ぞ吹

この三のは[illegible]侍也

[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

[illegible]

崇徳院

百首歌よませ給ひける時

皇太后宮大夫俊成

[illegible]山田[illegible]秋[illegible]

[illegible]書也

中納言中務卿家の山家早秋といへる
心をよめる　法性寺入道前太政大臣
あき霧やたてのの小萩露ふけて
野もとに鳴く鹿の声
夕言に萩ふく風の音ふけて
ひとりやねざめ鹿の鳴らん
法性寺入道前太政大臣
宗徳院二百首歌
皇太后宮大夫俊成
萩のうへ葉そよや秋ふく風ふけて
露のこぼるる夕暮の空
題不知
秋ふかみ松ふく風もたえだえに
月をさしこす夕暮の窓
七条院按察使
ふるさとの萩のうへ葉の秋風に
露ほのめきて月ぞ出でぬる
藤原経衡
百首歌
ふく風の音をの床のうへ葉より
そよや秋の夜の露
相模
手もふれぬ千草の露の玉ぼこに
秋ふかきをば知りそめにけり

秋風吹しく
もふのそそれ

大貳三位（クワニ）

朝かりを萩のうつの露
やいやうくしてさいまも

曾祢好忠（ソヨシタヽ）

吹すす風をもうの秋の
延喜御時月次屏風

小野小町

大宮人のうつりて
紀貫之

神の森

まれるうつ雨をひとり
その時よりわう

山邊赤人（ヘノ）

宇治お岡白女（ケ）

權大納言長家

神ひて我もすまの
七月七日（ナヌカ）

藤原長能（ナガタヽ）

まれるうつ雨をひとり
のうそとうの色

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大の川のこと

御幸(ミユキ)

堀河院御時百首(ホリカハノヰンノミトキノヒヤクシユ)

なてさや別(ワカ)れの川と霧(キリ)立てゆくわれも

堀河院御時百首

中納言(チウナゴン)匡房(マサフサ)

大中臣能宣朝臣(オホナカトミノヨシノブアソン)

紀貫之

お中納言匡房(マサフサ)

行水(ユクミツ)に底のうつもれ木(ギ)の守(モリ)てふわれも

行水に底のうつもれ木とは守てふことをいふなるへし

名にし負(オ)はゝ逢坂山のさねかつら

後三位頼政(ヨリマサ)

かり衣(キヌ)秋萩(アキハキ)すれる野原(ノハラ)の萩(ハキ)ふきて

秋萩すれるとは萩の花の色のうつろひたるをいふなるへし

権中納言(ゴンチウナゴン)永縁(ヤウエン)

秋萩をおりて見(ミ)れは月(ツキ)ぬれぬ袖(ソテ)よりあまる露(ツユ)

月ぬれぬとは月の光のくまなきをいふなるへし

守覚法親王(シユカクホフシンワウ)

萩(ハキ)の葉(ハ)神(カミ)のきて言(コト)問(トフ)ふ風(カセ)

顕昭法師(ケンセウ)

風(カセ)の音(オト)のいまはねやまれ

高円の尾上の宮はやまとにありて聖武天皇の宮のまへの宮
かやといふ衣裳のさくらひし人のとへの宮をとゝふこと

文つらす

をく露もしつ心なく秋風に乱てさける真野の萩原

祐子内親王家紀伊

秋萩の花ちる野への夕露にぬれつゝきませ夜はふけぬとも

柿本人丸

さをしかの朝たつ野への秋萩に玉とみるまておける白露

中納言家持

秋の野をわけゆく露にうつりつゝわか衣手は花の香そする

凡河内躬恒

たれをかもまつちの山の女郎花秋と契れる人そあるらし

小野小町

秋と契れる人とさしてそれとさしてよめる也

藤原元真

女郎花野への故郷思ひ出て宿りし虫の声やこひしき

これは野への里とおもひて虫の宿るといふ心をよめる

千五百番歌合に

左近中将良平

夕されは玉ちる野への女郎花枕さためぬ秋風そ吹く

玉ちる野へは露ちるなり

蘭をよめる

公猷法師

宗のゆかりしも志ら露のぬれて匂ふ野への秋のを

崇徳院に百首歌たてまつりける時

藤原清輔朝臣

よそ人の藤の花の都しありけれはひさん
かいうのことさらきむすへ藤の花の都しありける故か
さんしきまとまある也
入道おほきおほいまうちきみ時百首歌よませ給
けるに
皇太后宮大夫俊成
いくや袖は志らつゆの露を昔も秋の花をこそ見て
いとくやとは思ふをかくやいひとふ也 述懐の心也
範永朝臣時秋のこゝろを詠める
大納言経信
花みよと人やなかりの野へゆきて心のかきりはてぬめり
人やすめぬハ人の中をもいふ也すへ行こと也
曽禰好忠
こゝろ降まて
露をたに人をかるしに枯まなる露わけける袖の花
露しりける露のいろさる也 勝ト書
貫之
山の端にほのさける朝露は志ののめすて進よりも
山家のてりしまへとふちかきて人てある花と言也すへ
坂上是則
ふる浅茅の原のかるかやのみだれて物をおもふころかな
人丸
秋の入野のうすすきつまこそうつりかたまつるうきん
このうつりいとハうつると云也 うの字やすめ字也
よみひとしらず

堀河院百首時

秋風のやどさむくふく夕暮は萩のうへこそ露けかりけれ

藤原基俊（モトシ）

百首歌たてまつりける時

萩のうへに月宿るをみるからに袖のつゆさへ消えぬべきかな

権大納言長家

すまで思ひこそやるさをしかの妻恋ふる秋の夜半の声

前大僧正慈円

言ふからにきこえのさをしかの妻恋ふるこゑの遠ざかるかな

（ク）

寄百首恋

拾遺

ものこそ詩を作て会ふ路秋初

とよみけるを

お大僧正慈円

みしかやいつよりおきのかりそめに

ひきこもられしこころなるさも

（ヒヤクレン）

寂蓮法師

題不知

よもすがらそでにみだれてかかる夜の

あまりにものをおもふころかな

西行法師

藤原定家朝臣

藤原雅経

藤原長能（タウ）

ひとの家に菊をうつしてつかはすとて

秋ごとにうつろふ菊の山里は
ちりぢりにこそ人もとふらめ

和泉式部

時風のまよひに申しつかはしける

菅祢好忠（ソネノヨシタダ）

秋ごとにうつろふ菊のまがきには
相模（サガミ）

暁の露ともきこえぬ風のおとに
法性寺入道おほい殿の家の歌合に雅風（ケ）



藤原基俊（モトトシ）

千五百番歌合に

深草の野辺の露をば分けながら
幾よしてすむ月をみるらん

前参議教長（キヤウチヤウ）

寄月述懐

おもふこと叶はぬ身にも住む月を
なほ恨めしと思ひ知るかな

右衛門督通具（ミチトモ）

大あらきの杜の木ずゑをとふ風の
おとにのみ聞く人ぞ恋しき

皇太后宮大夫俊成

守覚法親王家五十首歌

ありあけの月まつ窓の独のみ
柿本人丸 ケ
ものおもふ人の心のしるへにて
藤原有家朝臣
風わたる浅茅が末の露よりも
水無瀬 三十 ミソ
ものや思ふと袖のぬるるは
さ雪 廿二 ニソ 摂政 三十 ミソ 前太政大臣
百首歌たてまつりし時月
お大僧正 公意 四

堀川院の御時

題しらず

人もとふ心のさわぎ月いれてねやまの奥に物思ふ也

橋為仲朝臣

おやまでてとをちの里の月いれてねやまの奥に物思ふ也

従二位教長

法性寺入道前太政大臣家にて月の歌よみけるに

風吹て玉ちる萩の下露にやどもる秋の月

従二位教長

法性寺入道前太政大臣家にて月の歌よみけるに

月ゆゑにあかすながめし秋の夜の夢路にかよふ峯の松風

太宰大弐重家

和歌所にて人々に月の字をよませ侍りけるに

家隆朝臣

ふるさとの月の光のさやけさを袖の露にもやどしてぞみる

ふるさとを海の花へも時月哉

百首歌よませ給ける時月前

更ゆく秋をあはれと思ふ

題不知

法印尊円

ふるさとの秋もあはれや波小月のひかりもる

月のしろたへやうしたる海の夜もや

後成女

寄風家隆卿

久方の月の宮このゆく雲を

大家（カ）いるまでみるまくさもきく（ママ）月ありあけの夜

百首歌よませ給ける時月前草花

枯野大納言

この寺あたりの小萩さかりなるを、庭の月をながめよるとて、

おのづからをぎの葉ならぬ秋風も

建仁元年三月亭

時月

八月十五夜和寺にて

梅ならぬかをの庵も軒ふるさと

この時入合の山家秋月といふことを

月前松風

寒蓮法師

月に打なびく木のまより

打ふく松風うつて

[illegible]
山月といふことを

鴨長明　それハトかくの社家の民也

[illegible]
[illegible]
[illegible]

大江千里

源道淵

和泉式部

上東門院小将

菅原孝標女



相模

大納言経信

左京大夫顕輔

雲のいさゝかゆへさやけき秋しる色も世にて寒きる事
あるなりや

題不知

道因法師

山のはに雲の衣をぬきすてゝひとりも月のたちのほるかな

殷富門院大輔

なかめつゝ思ふにぬるゝ袂かないくよかは見ん秋の夜の月

いくよもあらしと思ふ寄也

式子内親王

よひのまにさてもねぬへき月ならは山のはちかき物はおもはし

ふくるまてなかむれはこそかなしけれ思ひもいれし秋の夜の月

夜中過くこそそまつりしけれ

摂政太政大臣

雲はみな拂ひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

雲はみなはらひつくしてみてあれと思ふて秋風松にのこれ
る秋風とよめり又一首の寄見事也二句ともにすなる寄
まつとよめり雲のはれたる月は見事の雲を払ひて又秋風の
松にふく音かきく事のおもしろきなと也

家に月五十首哥よませ給けり

月たにもなくさめかたき秋の夜の心もしらぬ松の風かな

月をたにみてなくさまぬ秋のよなるに又松の風のかなしきをそへたる
ますと也

藤原定家朝臣

さ莚や待よの秋の風深て月をかたしく宇治の橋姫

さむしろ衣かたしきとひとりや我をまつらんといふ古哥
とよめり宇治の橋姫と云寄この寄の心をとられてよめるなり
まつ宇治の川水とよみし橋姫かまつよとよめり也

題不知

右大将忠経

秋の夜の名ひとつ
ゆえて帝ことに
幻も
秋こそ
月
月
秋のよやう月

雲月

横政大臣

源家長

秋の月
ふるさと
風わたる田の
和ての所
鷹のこゑ

題しらず

あくかれて秋ぬる夜の庵のつまて月にやとる庵の小窓

大中臣定雅

秋の田の風のうら秋のとこのいなゐ月やもれてしらする露

崇徳院御時百首哥めしけるに

左京大夫顕輔

秋の田にいほさす志つの苫をあらみ月とともにやもりあかすらん

いほさすハいほりつくる也

百首歌よませ給ひける時秋のうたに

式子内親王

秋の色は籬にうとく成行とも手枕なるゝ閨の月かけ

秋の色はまかきにうとくなるとハ草木もうつろひかれゆく也

秋歌中に

太上天皇

秋の露や袂にいたく結ふらん長き夜あかすやとる月かけ

千五百番哥合に

左京大夫通光

更にまた暮をたのめと明にけり月はつれなき秋の夜の空

摂政家五首哥合に暁月の心をよみ侍る

二条院讃岐

大かたの秋の寝覚の露けくはまた誰袖にありあけの月

おほかたとハそうてのこと也

百首歌たてまつりし時

藤原雅経

新古今和歌集巻第五

秋歌下

和歌のそのことわりてとのことく

藤原家隆朝臣

下紅葉かつちる山の夕時雨
（このもと底かけうつるいろをみて）
ひとりうきたつ千鳥なくなり

百首歌奉たてまつりし時

入道左大臣

山風の底のみるまに月さえて
（ヤツハシ）
庭もせの萩也ものの下葉色

寂蓮法師

（ニヒニ）
秋ふかき夕の雲そ梢なる
（ニヒニ）
後も法師

お中納言(三十)通房

百首寄恋

惟明親王(これあきら)

土御門内大臣

権中納言俊忠(としただ)

千五百番寄合

鳴子

家に歌合せ侍りけるに山家鹿

よすがの妻こふ鹿の鳴くなへに

題不知

源道済(みちなり)

小出羽守(こいでわのかみ)

白川院(しらかわいん)

西行法師



お大使の宣旨

鳴子の声にて山家の里を

家に歌合せ侍りけるに鹿を

よすがの妻こふ鹿の鳴くなへに

題不知

源道済(みちなり)

権中納言俊忠(としただ)

百首寄恋

惟明親王(これあきら)

土御門内大臣

我のみと思ふ心の

百首寄鹿

権中納言俊忠(としただ)

小出羽守(こいでわのかみ)

白川院(しらかわいん)

西行法師

里家秋興(ノケウ)

山里ふかき風ぞ秋なる
郁芳門院
中宮大夫師忠
秋やとき虫のねごとに聞ゆらん
露をおもみと稲葉そよぐも
前大僧正慈円
後恵法師
萩原や霧の絶間に露ふけて
月になびける秋の一むら
権大納言長家
袖の上に親と家路の月ぞ見る
ふるさと秋のかげぞ寒けき

横政大政大臣家の百首奇合
前大僧正慈円
秋風
稲葉ふく露の玉ゆれ音もして
雨とやきかん秋の夜の月
読人不知
秋来ぬと朝ふく風を山田もる
庵のとまやに目をさましつる
お中納言経房
吾妹子が衣手寒し秋風の
吹くなる野辺に雁鳴くなり
中納言家持

中納言家持

恵慶法師

菅贈太政大臣



藤原基俊

白河院

堀川右大臣

困庭(テイ)

法金泉院

白河院

贈左大臣長實（ソウ　ナガ）

秋の入道家集をみてやりし次に

百首哥たてまつりし時

物ごとに秋やうつれる

常ならぬ秋の夕ぞ袖はぬれける

秋哥中

寂蓮法師（ジャクレン）

露ふかき袖よりうつる秋風に

いろもなきをもいかがとはまし

皇后宮

冬上天皇

霜ふかき袖の上よりおく露の

いかでか秋の色にいづらん

題不知

西行法師

ながめやる袖よりうつる秋風に

守覚法親王

百首哥中

藤原家隆朝臣

しの薄ほのかに袖にあまるまで

百首歌中

秋風ぞ吹

ながめやる袖よりうつる秋風に

いくよの露をかけてきぬらん

式子内親王

秋風に乱れてなびく萩の上の

露ぞこぼるる玉にぬかねど

萩原浦手（ハギハラノウラテ）朝臣

秋風に乱れてなびく萩の上の

露ぞこぼるる玉にぬかねど

お大僧正慈円

おもふこと言はでぞただにやみぬべき

我とし知らばいはずもあらじ

千五百番詩合 秋

夜もすがら山のいろのうつりゆくを
　　いのちとおもふ秋のもみぢば

和三年内裏合 月下擣衣

里ごとに月やあつめて擣つらん
　　まちかてのめる砧なるかな

百番歌合 恋

萩原宣家朝臣



夜もすがら山のいろのうつりゆくを
　　いのちとおもふ秋のもみぢば

和三年内裏合 月下擣衣

里ごとに月やあつめて擣つらん
　　まちかてのめる砧なるかな

百番歌合 恋

萩原宣家朝臣

秋ふかみまきもく山のあらしより
　　おくるともなき初雁の声

擣衣

中納言匡房

山里の軒ばの風のうちしめり
　　夜寒をつぐる砧なるらし

擣衣

大納言経信

たれ聞けとあやなく秋の夜もすがら
　　ふるさと寒く衣うつらん

擣衣

藤原雅経

みよし野の山の秋風さよふけて
　　ふるさと寒く衣うつなり



秋ふかみまきもく山のあらしより
　　おくるともなき初雁の声

擣衣

中納言匡房

山里の軒ばの風のうちしめり
　　夜寒をつぐる砧なるらし

擣衣

大納言経信

たれ聞けとあやなく秋の夜もすがら
　　ふるさと寒く衣うつらん

擣衣

藤原雅経

みよし野の山の秋風さよふけて
　　ふるさと寒く衣うつなり

式子内親王

百首歌たてまつりし時

深き夜のよはの衣うつ声

九月十三夜月をよめる

秋ふかき隣は何をする人ぞ

月をあはれと思ふらん

二首歌奉りし時

定家朝臣

秋風の吹くるままに高砂の

尾上の鹿ぞ声よわるなる

摂政太政大臣大将に侍りける時月前述懐

寂蓮法師

ひとりのみ山ぢのものは悲しきを

月の友よぶ秋の夜の声

月前詞

大納言雅信

秋の夜はいかにうつろふ月の光

いくよの秋をかきわたすらん

九月晦日

宮内卿

惜しめども今日をかぎりの秋の色

いかにとわきて袖のしぐるる

寂蓮法師

秋霧

太上天皇

河霧といふことを

作者未詳 建久

ももしきや川をのぼりくだりする舟の梶の下露

堀川院御時百首霧

権大納言 匡房

秋霧のたつ山の秋風ふけばこそ

清原深養父

人丸

秋風の吹くる方をそ秋霧の

秋風にたなびく雲のたえまより

題不知

曽祢好忠

山ふかみ霧の籬のしたれ

曲ある遠き人をとひ給へ

川霧

吹きとく風の音ぞ小倉山

霧

秋霧の立つ日の空は

初もみぢ風深く露
九条内前右大臣
秋の風ふきうつしてすそ
野の
よく人こころすみ
よりて
よそ
白雲を翅(ツバサ)より
大江千里
月おし
お大僧正慈円
大江千里
題不知
後恵法師
後徳大寺
詩合
藤原家隆朝臣
五十首
宮内卿

四人まあし吹そむる秋は来て木のめさまうらし宮内卿
秋はきたれとも時雨の秋は来ぬ心也とふてあし哀也

色かはる露をは袖に置迷ひうらかれて行野への秋哉
うらかれといふはすゑかれなり　木のすゑよりかるゝ也
ふかり

秋哥とて

秋更ぬ鳴や霜よのきり〳〵すや〳〵影さむし蓬生の月　太上天皇
秋ふかみまふけしき世の中の衰へゆく時節をおもはせよと
すゑのひろからぬ也このうき世を哀する哥也

百首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

蛬鳴や霜よのさむしろに衣かたしきひとりかもねん
ひとりかもねんといふにひとしくまことのあはれさ
またひとりねんといふ心ありけり

千五百番哥合に　春宮権大夫公継

寝覚する長月の夜の床さむみ今朝吹風に霜や置らん

和哥所にて六首哥つかうまつりし時秋の哥

おほ僧正慈円

秋ふかき淡路の嶋の有明にかたふく月を送る浦風
あはちの嶋にて秋の夜の月を送る浦風を吹とよめる也

暮秋の心を

長月もいく有明に成ぬらん浅茅の月のいとゞさひゆき

摂政太政大臣大将に侍りける時百首哥よませ
侍りけるに

寂蓮法師

鵲の雲のかけはし秋暮て夜半には霜や冴わたるらん

ちりてまゐりし人もなきのとも也

桜の紅葉を　中務卿具平親王

心あらハ紅葉しぬらん山桜さのみ花のちるをおしみし

紅葉透霧ニと云事を　高倉院御製

うす霧の立まふ山の紅葉ハさやかならねとそれと見えけり

秋哥とてよめる　八条院高倉

神なひのみむろの梢いかならんなへての山も時雨する比

宜秋門院の丹後ニすゝめ給ふ

太上天皇

鈴鹿川ふかき木葉に日かすへて山田の原の時雨をそきく

入道前関白太政大臣家ニ百首哥よみ侍りけるに紅葉　皇太后宮大夫俊成

心とや紅葉ハすらん立田山松ハ時雨にぬれぬ物かハ

大井河にまかりて紅葉見侍りけるに　藤原輔尹朝臣

おもふ事なくてそ見まし紅葉ハ嵐の山のふもとならすハ

題不知　曽祢好忠

入日さすさほの山への柞原くもらぬ雨と木葉ふりつゝ

百首哥奉りし時　宮内卿

立田山あらしや峯によはるらんわたらぬ水も錦たえけり

あらしのよわるゝハ川の水のくすまさし

き大将軍祭の時家ゝ百両の人合一ツ
よりそなへ候物
柿原大将軍
柿原志げをを多やうの月へ杜の下に等杜原紅
時しも浪さへ色こいつゝじ
障子の絵一葉
元家勢
後頼勢
百首寄よせまつ時雨
弐子内親王



桐の木ゝ
彫之頃
人ゝ手風一このもとに
守覚法親王
春宮権大夫経
家隆勢
たつた
西行法師

すゝしそうに吹く風

法住寺入道前太政大臣家にて詩合し
ける時

前参議親隆（サキノサンギチカタカ）

秋のくるのたそがれ（ヨヒ）ごとに立そふ紅葉ちるあらし
夕風

二条院讃岐（ニジョウインサヌキ）

おのづから紅葉の名たゝ梅がえをわれとわけゆく山川の水

歌合

人丸

龍田川紅葉ちるなり山のあなた風吹きやらし

権大納言長方

あすか川もみぢ流るゝ山のあなたやうき秋しらぬ

やうにまのことも有ける人の家にて紅葉
ちるを見て

長月（ナガツキ）のしぐれ（シグレ）を雨と降らせつゝ風山の紅葉
流すなりけり

権中納言経（ツネ）

紅葉ゝをちらす嵐の梢（コズエ）ゆゑ山路（ヤマヂ）の秋は
家に百首歌合しける時

前大納言忠良

雨と聞くのちの涙（ナミダ）ぞ袖（ソデ）をうつ

権大納言公宗

紅葉ゝをちらす嵐の梢ゆゑ山路の秋は
雨と聞くのちの涙ぞ袖をうつ

権中納言雅（マサ）家（イエ）

紅葉ゝをちらす嵐の梢ゆゑ山路の秋は
雨と聞くのちの涙ぞ袖をうつ

津國に行き通ひつゝ住み
ける頃夏の初めつかた
雨のそほふりて来ま
ことに秋ちかくなりぬ
るやうなりければ
皇太后宮大夫俊成
夏衣
たちかへてけふ
かぞへつゝ秋をまつ
身にもはや
風の涼しくなりぬる
皇太后宮大夫俊成
初秋の心を
よめる
夏衣
たちかへてけふ
かぞへつゝ秋をまつ
身にもはや
風の涼しくなりぬる

新古今和歌集巻第六
冬歌
千五百番歌合に初冬の心を
皇太后宮大夫俊成
さゆる夜の
ねざめの床の
さむしろに
涙の氷
とけぬなりけり
百首歌たてまつりし時
皇太后宮大夫俊成
冬の夜の
ねざめの床の
さむしろに
涙の氷
とけぬなりけり
五首歌奉りし時
皇太后宮大夫俊成
冬歌
神な月
風に紅葉の
ちるときは
たつ
神な月
風に紅葉の
ちるときは
龍田の
神も
散るをいとふか
皇太后宮大夫俊成
龍田の
神も
散るをいとふか

名月やをうみの船そさうの紅葉へうつてこそせん
やをとすてしも

接待泉院前よりの
紅葉浮かうにみえる心を詠ず

前右京権大夫宗朝

錦をしきてとうみんみち
このくれ紅葉のころ
ゆきのふくいます

大納言経信

おくら紅葉のまあ大井川
もみちのまあというれの也

大井河にて

大井河紅葉流るる水の上に
なを舟さすく計りなり

深山の紅葉という事を

藤原家隆朝臣

深山の流とみるや大井川
もみちを波のをるにやあらん

後頼朝臣

もみち葉の人をも恨さきはてゝ
雪のふる日も来ぬ山ざと

題不知

をのつからせとする松の夜の雨
未紅葉ぬ苔のころも

春日社の奉納

お大僧正慈実

未紅葉ぬ前ふりくる神のみそぎとて

木葉ちる時雨やまぬ我袖も
もみぢそめてふ夕涙かな

左衛門猪通具

初時雨志賀の山路の紅葉
時雨て神もわけ入深き夕暮

信濃

七条院権大納言

時雨つゝ神もわけ入深き夕暮
いかに染めて木葉ちるらん

藤原秀能

山風の吹きおろすより木葉散て初雪ふかき冬の里山

祝部成茂

唐錦秋のてやふるさとを
ちらすやふく山を染るしぐれは

頼輔卿家(ヨリスケ)の歌合に

時雨つゝ木葉の心を

藤原資隆朝臣

時雨ふる木葉の色を染かねて
ぬれてとうれふる袖かな

法眼慶算

題不知

十月ついたちの森にて

鉄国法師

ふる雨深くて今日も暮れぬらん

清原元輔

冬を淺みまだくれ時雨ふりながら

鳥羽殿にて檜宿時雨といふことを

後白川院御歌

ふりすてゝ誰が庵にか時雨ぬるさ夜ふかき

前大僧正慈円

やどり木も拾ひ置かぬ神のもり

やどり木とはひよどりの食ひ殘したるをいふなり

冬部中

冬上天皇

深くあやしくいつるまでの時雨かな

人丸

時雨のあや深くて今日も暮れぬらん

これまでのうた皆冬部なり

春中

梅の花咲きて時雨ぞ降りそめし

それや思ふことを思ふなるらん

百首歌たてまつりし

二條院讃岐

紅葉を
吹く秋風の
春日社
家
和
千
たく
藤原家隆朝臣
源泰光
右清原通臣

千五百番
今
源具親
時
五十首歌
雨
良暹法師

紅葉ふる
そうて紅葉ふるようなれども
そしるねし

峯の松

秋の色を拂ふや久方の月の桂も木の葉なるらん

題不知

藤原雅経

我門のり田圃

清輔朝臣

千五百番歌合

皇太后宮大夫俊成女

家集に載せたる松の月

寂蓮法師

お大僧正慈円

朝の霜

西行法師

月みてや神なび

題不知

式子内親王

風さむき木葉時雨

殿富小路大納言

冬枯の杜のしたくさ霜の上に

もみぢをうつす夜半の月かな

千五百番歌合

家集に載せたる松の月

寂蓮法師

寄墨染恋

神のうき誓ありとも

藤原雅経

新古今集の時代を代表する歌人の一人。

橋上霜（キョウジョウノシモ）

橋の上に霜が降りているさまを詠んだ題。

新古今

夏の風雲のうごきを

源重之（シゲユキ）

夏の風雲の動きを詠んだ歌。

法印幸清（ホウインコウセイ）

法印の位にある僧侶。

菅原道信朝臣（スガワラノミチノブアソン）

菅原氏の出身で朝臣の姓を持つ人。

冬寄中

冬の寄題を詠んだ歌。

太上天皇

後鳥羽上皇。

摂政太政大臣

摂政・太政大臣の官職にあった人。

宗徳院法師時百首寄奉ける

宗徳院法師が時百首を寄せ奉った。

清輔朝臣（キヨスケ）

藤原清輔。

後成女

百首之中

お大便所之図

中納言家持

延喜十四年 尚侍（ナイシノスケ）

尚侍というのりのすけともいうまた女房の名

中納言（カナノスケ）兼輔

同沸時大井河にて
新古今集のよろ
歌ふ
坂上是則
野べよりおくれてなく
野への露はまだひぬまの
雲滅院にて寄てまつる
大納言成通 物の集
冬深く成ぬるものを
歌ふ
西行法師
ふりそめてつもらぬ
冬乃山
康資王母
あまりに
津國のおきいそ
歌ふ
あしの法師
昔思ふ
冬乃寄
歌ふ

百首寺奉
[illegible]
[illegible]
[illegible]

権大納言家持

ふるさと遠くなりにし奈良の都の
ゆきかよふ道しばしばも
あらなくに
あはぬ日数を
へだてけるかな

大伴坂上郎女

ふるさとの奈良の都を
来てみれば
春日の山は
もとのままなり

守覚法親王家六条

秋ごとに
月の桂やまさるらん
ひかりをそふる
袖の白玉

皇太后宮大夫俊成

題不知

ひさかたの
月の桂も
折るばかり
家の風をも
吹きつたへなん

山辺赤人

ふるさとの
奈良の都の
八重桜
けふ九重に
にほひぬるかな

伊勢大輔

名にしおはば
逢坂山のさねかづら
人にしられで
くるよしもがな

三条右大臣

名にしおはば
いざ言問はむ
都鳥
わが思ふ人は
ありやなしやと

在原業平朝臣

白雲に
はねうちかはし
飛ぶ鶴の
ともしろたへに
雪は降りつつ

僧正遍昭

わたの原
八十島かけて
こぎ出でぬと
人には告げよ
あまの釣舟

参議篁

天つ風
雲の通ひ路
吹きとぢよ
をとめの姿
しばしとどめむ

僧正遍昭

筑波嶺の
峰より落つる
みなの川
恋ぞつもりて
淵となりぬる

陽成院

陸奥の
しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
われならなくに

河原左大臣

みちのくの
しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
われならなくに

源重之

堀河院に百首哥めしてたてまつりける

祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の浜の濱千鳥波たちくらし夜半に鳴也

寄て歌よみてまつりける時

摂政太政大臣

月そすむされはここに紀の国や吹上の千鳥ひとり鳴也

誰かはここにきたりてみるへき誰かはここにきて見ん只我ひとりとよめる也随分と思ふ哥といへり

千五百番哥合に

正三位季能

さ夜ふくる都も近くすみてこそ月は塩やの浦へゆくらん

高陽院の障子に鳴海の浦かける所

右衛門督通光

すゝ人の日くるゝ浦にかへる袖よりも千鳥なく也

松かける所

藤原秀能

風吹はよるよ寄るこその里思ひの浪に寄る千鳥かな

寄るこのつくさるかた也

文治六年女御入内屏風に

正三位季経

風さむみ海の磯の村の寄る立かへるこれも名なき也

しほにたちてもむし

家にて哥よみける時

藤原雅経

天の河やそせの夜のしらぬ数ゆくさむき守の狭也

堀川院百首哥たてまつりける時

重ねてうたのこころを述べて奉れる歌一首

百首哥

さ遥に雲の上なる月見れば今ぞ白妙の衣手寒き

よめる

うち初めて雪ふりつもる時分

雪のうちに春はきにけり鶯の凍れる涙今やとくらむ

よめる

後徳大寺左大臣

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける

皇太后宮大夫俊成

白山に年積もる雪や消えぬらむ夜深く見ゆる有明の月

お大納言経信

刑部卿範兼

ゆきやらぬ越の白山雪ならで心に積もる恋もするかな

高倉院帥宰

よしの山やがて今朝や白雪のあとなき嶋の春の曙

題不知　寛仁法師

[illegible]

山里のともや[illegible]

野寺雪（ユキ）

[illegible]

[illegible]

百首哥の時

題をあて神祇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題不知　山邊赤人

田子の浦ゆ打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
（この歌は随分人口に膾炙した歌で、古来種々の説があるが、一つは富士山の雪の降りつもる状を見て、その高く清く美しいのを讃美したものとし、一つは富士山の雪の降る状を見て、その高く清く美しいのを讃美したものとする。）

延喜御時奉れる　紀貫之

雪のうちに春は来にけり鶯の凍れる涙今やとくらむ

守覚法親王家五十首歌奉りける　藤原俊成

雪ふかき山のかけはし音絶えて人ぞ通はぬ峰の白雲

雪ふかき野辺のまがきの笹ゆゑに（ウツモ）月をあまたの里人ぞ見る

まがきは、ふつう柴などを結ひ廻したものをいふ。

冬歌　小侍従

かきくらす心の闇にまどひにき雪降る日しも消えんとすらん

雪ふかき庭の面にわれ行きて帰るあとなき我が心かな

この意は、雪の降る庭に出でて、帰るあとの消えないのを見て、我が心の帰るあとなきを歎ずるの意。

雪深き山のかけはし音絶えて人ぞ通はぬ峰の白雲

お大僧正慈円

冬草の枯れ〳〵なるも人なつかしき雪のあしたかな　大原（ニヤウレン）尊雲法師

最勝道なかりせばいかでかは今日の雪をも跡とめて見む　太上天皇

百首歌中に

はつ雪の降りしく時はみよし野の山の白雪思ひこそやれ

千五百番歌合に　右兵衛督通具（ヤヒ　ミチ）

春ごとに花の宿かる旅人の帰るさ惜しき雪の夕暮

百首歌めしける時　従二位（ニイ）家隆

梅が香をたれにとはまし我宿の軒ばかすめる春の夜の月

宗徳院（ソウ　トク）御哥



鶯のなくこゑきけばうぐひすの谷よりいづる春はしるかな


内大臣（ナイ）

千五百番歌合に

法性寺入道前太政大臣

とふ人の庭のみ雪しきたえてかへるあとなき山ざとの道

京極前太政大臣高陽院（カヤ）殿（テン）

前中納言（ナカ）定房

ふりつもる雪にうもれて跡もなし吉野の山の春のあけぼの

左近中将（ヒダリ　コン　チウ　シヤウ）

ろくろのかのくまりいわ為てよその川その月をみるか

植大とよこ御宮苗

権僧正永縁

中くまきてハ酒あて埋火のいきてハ金なき世子るれ

埋火のいきて秀句し

百首奇芳時

式子内親王

日なたる雲をよめける炭竃の煙をさし大原の里

年のくれよつろしうる

西行法師

よの川いわすよふ人やみてやもめかくま年の暮なる

年中人をまろうしをやふかんとまつなきとしもまやのとろうやさき

よりれこうかと云也し

よしの暮によまひ世待ある

上東門院兵衛

せりてハよふそふおとかし暮れしと何ちゝ霜

皇太后宮大夫俊成

隣行よの西郷のさびし雪と帰りゆる年の暮ぬ

大納言隆季

あさりし紀年やすみかとそあらふひとも扨ふる代但く

とめるんハりとめるんし去暮しひとりらすいふ隠しよのひ

まれ海のうろのひさとみまくし

俊成は家よ百首よりよま世給けるは歳暮の

俊恵法師

ぬと

欲つらしよて暮の露の命いかつりつまりむそまて

おりひいてとわまりわうくもしし

百首歌奉りし時

小侍従

石上（イソノカミ）神のゝ小菅露をおもみ
　石上ふるさとにすめるものゝふの
　やそとも
年のゝて浮世の雪ぞしら髪の
　うき世の雪ぞしら髪のと
　いふ心なるべし下略
朝毎のあや丹ぬりの軒ばかな
　今もとゝいふ心なるべし
　ふるもの也

お大僧正慈圓

椎律師（リツシ）隆聖（リウシヤウ）

百首奇うあそばされ
入道き大臣

年のうちの春
　年のうちに春はきにけり
　ひとゝせを去年とやいはん
　今年とやいはんとよめる
　古今の歌也
年の内に春の来ぬるを人
　いかにとかや
ひさかたの光のどけき春の日に
　しづ心なく花の散るらん
　古今の歌也
和泉式部

入道あそば百首歌よませ給ひけるに戯言の心を
　よめる
　浪まくら
石ばしるたきの白浪枕とや
　浪枕とやて年の字有

賀歌

沛詞物（ミコトモチ）

代作（かはりて）

仁徳天皇御歌

藤原清正（キヨマサ）

題不知　　貫之

君を思ふ年のすゑとは白雪の
ふりてつもれる山ぢなりけり

亭子院の六十賀屏風の
歌の内

つるかめもちとせのかずをつくすべき
ためしに君をいはふけふかな　　延喜御時屏風

ゆきとしるしるも山ぢの白雪の
ふりてつもれる年のうれしさ　　貫之

祐子内親王家の六十賀の屏風
の歌の内

君が代はつきじとぞおもふかぐやまの
さかきのかげのうつろはむかぎり　　土御門右大臣

年毎に生ふる行の松ならば
千年ふるとの松と共にん　　伊勢

題不知

山川の流のたえずうつれども
もとの水にはあらぬなりけり　　貫之

延喜御時屏風

年毎に生ふる行の松ならば
千年ふるとの松と共にん　　躬恒

題不知

山川の流のたえずうつれども
もとの水にはあらぬなりけり　　貫之

文治六年女御入内屏風

仙人の形ある神仙の家に住めるところ

貞信公家屏風

神無月時雨ふる

清輔朝臣

紅葉ちる山風ふけばちるもみぢ白浪のよする岸の久しく紅

按一条院ともいれ申せ紅葉ちる九月つごもり



宮ゐ殿二條院白川中納言殿

はるの来ぬ二條院白川中納言殿

春来ぬと二條院白川中納言殿

ふるものとせをへてすめる月の影の

承暦内裏歌合

池水の代々ふるまで底清き

堀川院大嘗會

成て後ふる紀伊典侍

六條右大臣

君か代の千年の数もかくれなくくもらぬ空の光にそ見る

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよみ侍ける

前大納言隆国

宿の上に生ふる小松の枝ことに君か千年の数そこもれる

寛治八年関白前太政大臣高陽院の歌合に

祝の心を　康資王母

万代を松の尾山の枝しけみ君をそ祈るときはかきはに

ときはかきはハ常とこしへと云心也　堅固トモ書

後冷泉院おさなくおはしましける時卯杖の松を

人の子に給はせけるに読侍ける

卯杖とハ正月七日白馬節会乃時の事也

大弐三位

相生の小塩の山の小松原今より千代のかけを待たなん

永保四年内裏子日に

大納言経信

子日するみかきの内の小松原千代をはほかの物とやは見る

みかきハ御垣也　内裏の事也

権中納言通俊

ねのひする野への小松をうつしうへて年のをなかく君そ引へき

年のをハ年のいとゝ云事をいふ也　糸のとをき白也

寛治二年内裏の歌合に祝の心をよみ侍ける

前中納言匡房

君か世ハひさしかるへしわたらひやいすゝの川の流たえせて

題不知　読人不知

わすれ草 わが身にたのむ 人の 糸 春のの 思ひ
多年苦労まことの心ざしと云事也
乱れ 詩上有二百大夫一下有二千歳巻一と云百人の心と云事也
多年の巻と云事也

二條院の時 花有春色（リキシュンノ）

刑部卿

君を 思ひ あまりて なほ 恋しき 時は 山の 端（ハ）
同御時 南殿（ナンデン）の 桜の 盛りに 年ごろ 仕うまつれ
ど 思ひの ごとく なら（ナラ）ざりける 人の 参（マイ）りて 侍
りけるに 女房の 代（カハ）りに よみ 侍りける

君を 思ひ あまりて なほ 恋しき 時は 山の 端（ハ）
力にて も なほ 君を 思ひ 恋ふる 心 を 人 に つよ り 名
同御時 南殿（ナンデン）の 桜の 盛りに 年ごろ 仕うまつれ
ど 思ひの ごとく なら（ナラ）ざりける 人の 参（マイ）りて 侍
りけるに 女房の 代（カハ）りに よみ 侍りける

刑部卿

君を 思ひ あまりて なほ 恋しき 時は 山の 端（ハ）
力にて も なほ 君を 思ひ 恋ふる 心 を 人 に つよ り 名
同御時 南殿（ナンデン）の 桜の 盛りに 年ごろ 仕うまつれ
ど 思ひの ごとく なら（ナラ）ざりける 人の 参（マイ）りて 侍
りけるに 女房の 代（カハ）りに よみ 侍りける

百首奉りし時

式子内親王

玉（アカラ）の 緒よ 絶えて 乱れ 初めし 我が 心 弱 く
常も 雨の ふる 日は 限る 物 と 思ひ ける 哉
京極殿 にて 人々 と 春 恋 の 心 を 詠 み 侍 り し に

春 毎（ごと）に 花 の 下 に て 我 が 身 を 思 ひ 寄 せ ず は 物
百首奉りし時

権中納言定家卿

玉 の 緒 よ 絶 え て 乱 れ 初 め し 我 が 心 弱 く
百 首 奉 り し 時

春 の 夜 の 夢 の 浮 橋 と だ え し て 峯 に わ か る る 横 雲 の 空

千五百番哥合

君をおきてあだし心をわが持たば
末の松山浪も越えなむ

八月十五夜和哥の会

左大臣

月多み秋なれども君こねば
寝ずぞ一人ながめあかしつ

八月十五夜和哥の会

宮内卿

月ごとに秋はきぬとも君こずば
いつをかぎりと待ちわたるべき

和哥所の会

源家長

建久七年入道前関白太政大臣家にて人々
歌よみ侍りけるに

お大納言隆房

[illegible]
[illegible]
[illegible]
長和五年大嘗會悠紀方風俗哥近江國
[illegible]
參主殿頭
[illegible]
[illegible]
[illegible]
承暦二年大嘗會悠紀方屏風近江國歌
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大江こそて生れて来ま道あるよふてまふく
大江山のてなのまそれてとそ寺そまり

仁安元年大嘗會悠紀方寺をけつ稲（イナ）
壽（ウタ）寺　後成

あふこのやまのこのもとそけつてあふ代（ヨ）のやまにあ千年
ふるものやこのもとひろ同（ヲナ）しあふやとそおもふ貢（ミツ）のや

元暦元年大嘗會主基方吉野
或ノ大納言光（ミツ）範（ノリ）

すれ落（オチ）ちもみち水風
元暦元年大嘗會主基方稲春寺毎波
國長田村とよもふか

なつつき寺（テラ）とい大嘗会主基方吉野
ある地

稲代（ヨ）もふ此（コノ）ころやはつかりこきつるはくまてきき
やはらねはかりふけゆくよもの秋風

権中納言兼光（カネミツ）

建久九年大嘗會主基方屏風　貢（ミツ）拝
権中納言資實（スケサネ）

常盤（トキハ）なる松井のみつ（ミヅ）そふかそ毎（ヘ）ふる

新古今和歌集考巻第八

春傷寄

題不知

僧正遍昭

未の露もとよりはかなき世なれども
老ぬ不定のよにぞ成ぬる

小野小町

春雨の降るに井の水ますかげを
見れば我身もふりにけるかな

中納言兼輔

1三條の右大臣の女

桜ちる春の木ずえの風寒み
花の衣をきる人ぞなき

[illegible]
也諒闇とうじく侘ぬる天下くもやこころ
すみのぼりて書し

四暦二年諒闇の春

[illegible]
すみ染のくらき世の空
[illegible]

道信朝臣

あさぢふも色やまさると見る迄に
やどの人目も枯わたるかな

成尋法師

六条坊門（ロクジョウボウモン）


杜門（ホクモン）
大宮大夫宣家（ノブイエ）
陽院（ヨウイン）木綿四手（ユウシデ）
逢（アヒ）
西門院 無集


あやまり


近衛院（コノエイン）
皇嘉門院（クワウカモンイン）
九條院


あやまり

妻力海（メノカイ）

小野宮大臣

秋のしおれさる草ともあらしそふきまよふ人の

大貳三位

ゆくへなき空ふく風のたよりたに我にことつてよ

並ふる雨のそらもとまらぬ

鷹義之(キヨウ)

女郎花(ヲミナヘシ)なひくをみれは秋風(メ)の

障子(イン)



神のいさめる

従一位源師(モロ)

智(チ)恩院入道前太政大臣

神のいさめる

注連(シメ)

権中納言俊忠(トシタヽ)

[illegal] のとつきうらいれ
とつきうらいれ
母の方面うりけるとき
おさめうらうみ
帯う
皇太后宮大夫俊成女
今はさかり経母うらいれ
とて
今はさかり経母うらいれ
とて
母の方面うり帯う
定家朝臣
ふりゆきまもりて
玉津嶋の浜う波うち
玉津嶋のうらうみ
ち秀宗方面うりて
まさ物帯う
右京大夫
藤原秀能

[illegal] 寝ふかき
久我内大臣まうのぼり
内大臣中将う物申う
殿富門院大輔
杜深き寝ふかき里
ぬう
土佐門内大臣
今着わすれ時うれ
このひて物帯う母
て後物うう
大納言實家
ものうれ杜うれ
今うのうれ

[illegal] 杜うれ
[illegal] 杜うれ
[illegal] 杜うれ

源高昌私に万回ありて
鉢(イリ)回法師
命あまたの私て月ごろ
世中をうく人くあまた
宝方私に万回ありて
ほうしけるに紀条乃一私
おお大納言殿
ふこはた乃人でやまし
ケそやまとしとてのまふうち
十月(カミナツキ)ころ水無瀬殿
あまてけ乃ケと戸つつ
無常乃事あまたくまてつゐ物中
太上天皇
思ふもりつくまの乃人私
夢のうつつと乃ま
返し
夢のまち私機業ゆうふ
雨中無常といふ
太上天皇
ケ私人のつゐ乃雨ふ多ふれと
そそて人のそいふり機のそいふ雨ふ
ほまてうつゐ乃ま
枕(ヒ)把(ハ)曾太后ふうまて
十月(カミナツキ)ころの

人ノ中ニテモ
相模（サガミ）
神無月時雨ニ濡ルヽ紅葉
秋ノ字ハ中ノ字ノ誤ニ
右大将通房（ミチフサ）
扇ヲ忘レ
手ヲ取ル事ハ
再文（ふたゝび）ノ歌ノ
馬内侍（ナイシ）
易ク
ソノ
女帝（ニョテイ）
垣穂（コウホ）ニ
通信（ミチノブ）
水底（ミナソコ）
八通
一万餘（トウ）
東三條院
昔ノ

題不知

和泉式部

ながらへてしばしもとまれ秋の方ゆくへもしらぬ月

源通淑（三十）

投一条院中ゝ納言

なにはえのこやもかくれぬ人の身ハ

小野文大臣為尊卿

権大納言長家（ナガイ）



物とのみ秋の花ゝを折ゐけり

一条院ゝ御（ギョ）

源信明（サネアキラ）朝臣

ひさしかるへきかのみ見えて行ゐけまし

上東門院

逢ことをたのむの雁（カリ）もなきものを

後朱雀院ゝ御

けさハとやゝく

女御（ニョウゴ）藤原生子（ナリコ）

うとそへ雨ハ家ゐてあ也ゐ

小式部内侍身まかりて後つねにもちて侍りける手箱
を誦経にせさすとてよみ侍りける

和泉式部

恋わふときゝにたにきけ鐘のおとにうちわするゝ時のまそなき

上東門院小少将身まかりて後つねにうちとけてかき
かはしける文の物の中に侍りけるを見出て加賀
少納言かもとにつかはしける

紫式部

たれか世になからへて見んかきとめし跡は絶せぬかたみなれとも

返し

加賀少納言

なき人をしのふる事もいつまてそけふのあはれはあすのわか身を

僧正明尊かくれて後久しく成て防すゝ岩に
まはりにて草生茂りて跡も海に成けるを
見て

律師慶暹

古人の跡をふもとて来しかとも世のなかはるさまにあはれなり

世のはかなき事をなけくころみちのくに名ある所〃
かきたる絵を見侍りて

紫式部

見し人の煙となりし夕より名そむつましきしほかまの浦

後朱雀院かくれさせ給て源三位かもとにつかはしける

辨乳母

あはれ君いかなる野への煙にてむなしき空の雲と成らん

源三位

太政大臣（ヨシトキ）

（イソイ）

大江通衡朝臣

新少将

按察使（アゼチ）（キミニテ）通

中院右大臣

権中納言通家の
むすめつぼねは
限りある身のひのもとの
女
人皇六十六代
後朱雀院
御時
権大納言
藤原経輔朝臣
女
世の中をおもひすてて
山ざとに
こもりゐにける
人の
もとに
つかはしける

いつのよも
かはらぬ山の
ありすがは
人の心を
みるよしもがな

前大僧正慈圓

いつのよも
かはらぬ山の
ありすがは
人の心を
みるよしもがな

我もいつまであるべきかは
前参河権守(ノリ)教長(カツヤ)
きりて成あとやすてん
もろともにきてこそ
寂蓮法師
もろともにあはれとをしれ
山ざとの
(ニヒリ)義居(ヤ)て
あるかひもなし

人ども参りて頭ども
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

小野小町

あらさらぬ前世の事も思ほえて

葉平朝臣

更衣の服をきて[illegible]

延喜御時

年毎に[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今和歌集巻第九

離別（ワカレ）哥

人の國へまかりける人に遣はしける

紀貫之

玉ぼこの道の露ふみしだきいかで来し世の人の恋しき

題不知

伊勢

わすれ草生ふるかきねを人とはばいつの里とかこたまし

あひしりて侍りける人の物へまかりけるに

大中臣能宣朝臣

秋きりのたちかくすらん
今ちかみ
見てもまたあかぬ心を
あふ坂の
関しもなくは
ゆきかへる
人
逢坂の関にわきやこゆらん
夜ふかき
中納言兼輔

きのせをも
ぬる
こまやさぶらふ
こまやさぶらふなりけり
源重之

衣川
今のみ
ぬれて

（あふさかの関にわきやこゆらん　夜ふかき　中納言兼輔）

寛昭上人
きのせをも
ぬる
こまやさぶらふ
こまやさぶらふなりけり
寛昭法師

衣川
今のみ
源重之

[illegible]
[illegible]
君をおきて河を渡らせたまふ
藤原範永朝臣
のうすうすさもあるべきことなり
大宰帥隆家下向
大宰帥といふ事の四月
[illegible]
[illegible]
枇杷皇后宮
[illegible]
[illegible]
[illegible]

天治元年四月廿日
寶（カノ）朝臣今の
ようけ
ぬ
中納言隆（イヘ）
七月廿九日
前中納言宣房
従二位（ニヰ）



今二月廿日大（タイ）貳（ニ）實（サネ）政（マサ）卿
の二の
ふる
基（モト）房



大僧正行尊

人のもとへ遣はしける

逢ふと見し夢の名残の袖の上に
なほ置きそふる春の夜の月

新古今和歌集巻第十

羇旅歌

和銅三年三月難波より
すみの江の岸に向ひて
船出して西を指して行く時
に作る歌一首 并せて短歌

天平十年十月伊勢国より
京に還る時に
雪に遇ひて作る歌

題不知

朝雲のあまねき空を白雲のやどる山のあけぼの

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ

大納言経信（ツネノブ）

音羽山峯の木の間よりもりくる月の影の涼しさ

夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

権中納言匡房（マサフサ）

ゆふだちの空さりげなき村雲に月やどりけり山の端の峯

山上憶良（シクウ）

いさごなすやりのもへの大伴の三津の浜松まちこひぬらむ

いさごなすやりのもへの大伴の三津の浜松まちこひぬらむ

あさぼらけありあけの月とみるまでに吉野の里にふれるしら雪

天遊ト云ヒケル

ひさかたの天つ空なる我いつかもすむべきほどに成りてゆかむ

ひさかたの天つ空なる我いつかもすむべきほどに成りてゆかむ

柿本人丸（ヒトマル）

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

僧正遍昭（ヘンジョウ）

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

僧都（ソウズ）の仁（ニン）

峯の松そこともわかぬ深緑いづれの枝に鶯の鳴く

峯の松そこともわかぬ深緑いづれの枝に鶯の鳴く



題不知

朝雲のあまねき空を白雲のやどる山のあけぼの

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ

大納言経信（ツネノブ）

音羽山峯の木の間よりもりくる月の影の涼しさ

夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

権中納言匡房（マサフサ）

ゆふだちの空さりげなき村雲に月やどりけり山の端の峯

山上憶良（シクウ）

いさごなすやりのもへの大伴の三津の浜松まちこひぬらむ

いさごなすやりのもへの大伴の三津の浜松まちこひぬらむ

あさぼらけありあけの月とみるまでに吉野の里にふれるしら雪

天遊ト云ヒケル

ひさかたの天つ空なる我いつかもすむべきほどに成りてゆかむ

ひさかたの天つ空なる我いつかもすむべきほどに成りてゆかむ

柿本人丸（ヒトマル）

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

僧正遍昭（ヘンジョウ）

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

僧都（ソウズ）の仁（ニン）

峯の松そこともわかぬ深緑いづれの枝に鶯の鳴く

峯の松そこともわかぬ深緑いづれの枝に鶯の鳴く

[illegal] [illegal] [illegal] [

名とや昔のまゝ其まゝて河面に杜を多くうゑ
亭子院のてもうけ
多武峯まうて和泉國りて高野へ
帰よみ給ふ

橘良利

なつかしの昔の春をみてうつる
ふるさとのあれたる宿や
志のみさうらうて書ける繪にうつの原といふ所を
橘人やうつの花ちる
友原浦手朝臣

花なうて春のあるしの
ふるさとをとひてやうつの
題しらず

都より越路へまかりあひて
入唐し給ふ時に
四宮まで

沖聚宣旨　如唐人物うつしの色

行末遠き
橘右近尉清茂
注橋脊注　脊柱の人面をうつすをいふ

志ふかき
よみ給ふ

寶方朝臣

船のうちにて
いつの間に
波路へだてゝ
浪こす

うのてすとの歌
そけさ経(キヤウ)
よみ侍る
我ゝ(アヽ)
利(リ)
紫式(シキ)
部(ヘ)
天王寺小家(コヤ)
海風(カゼ)
袮(ネ)
大納言(ナゴン)
理信(マサノブ)

指(サ)して暁(アカツキ)
恵慶(エキヤウ)法師
近中将隆(タカ)繩(ツナ)
後(ノチ)
法(ホフ)華(ケ)
花(ハナ)
初(ハツ)
枝(エタ)
門(カド)
杜(モリ)

堀川院百首歌　権中納言国信

山ふところの白露の晴おさまれる
そらもともしきものなふる

草枕ひとりぬる夜を
水邊擣衣

大納言師頼

源師賢朝臣

残のまよこそあはれなりけれ
たのめこみくる物思ふ夜の月
擣衣

大納言俊信

擣ちする衣の音をきけば
まこそまさりつれ

そりらす

みしかよの月の影
擣衣雪

大納言実季

松のすゑもわきてふく風
みねの雪ふもとの月
ふるさとの秋の夜ふけて
擣衣

権中納言長実

みよしのの風吹ぬまの秋の夜の
ものうちわぶるころもかな

擣衣

大納言経実

きりぎりす鳴ぬ霜夜のさむしろに
衣かたしきひとりかも寝む

[illegible]

[illegible]

大江為言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あきはつる秋山のもみぢ葉をまつ白雲

藤原雅経（三子）

おくやまのもみぢ葉ふみわけさそふ
さそふことのはもそともなくて
まつ風ぞ

和寺の月十首寺合の次に月前橋といふ

権大納言
藤原為家

ふけぬとてあまりて出る西の空
橋の月こそ秋のなごりなれ

お大僧正慈圓

東路の秋のなごりとうつる月
橋の月こそ旅のまくらと

赤の山を赤のこゝろとかく月の
赤しりのくとよまむ

海濱（カヒン）重夜（ニヤヤメ）

越前

いく秋の月を袖にのこしてか
影一つ残る

鳥（ニ）こゆる濱の濱萩
磯（イソ）のまくらをあらふ秋風

お中納言（三十）定房

百首寺そてよりて
旅中納言（サダ）定頼（ヨリ）

約束はいく秋とてか
或る月親王

松のかけしさむしろの さえ枕にはたれかぬれまてそぬるゝ袖かは

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

そてにあらそふ幾夜もあれや山鳥の岩根の苔の室に

猿なきてよみ侍る

　　　　権僧正永縁

白雲のかゝる梢にまかはてや深き山路は日は暮ぬなり

暮望行路といふ心を　のきをとはて見てし

　　　　大納言経信

夕日さす浅茅か原の旅人はあはれいつくに宿をかるらん

摂政太政大臣家歌合に羇中夕嵐といふ

ことを

　　　　定家朝臣

いつくにかこよひは宿をかり衣日もゆふ暮の峰のあらしに

かり衣日もとつけたる也

たひ人のとくとくと見ゆるか

たひ人の袖吹かへす秋風に夕日さひしき山のかけはし

　　　　家隆朝臣

古郷に聞きし嵐の声もにす忘れね人をさやの中山

　　　　雅経

しら雲のいくへの峯をこえぬらんなれぬ嵐に袖をまかせて

　　　　源家長

名も里もしらぬ野原に行暮ぬ里の山か月をまつらん

しらぬ野原にて方くをわきまへぬてる也

和哥の本哥合ニ霧中ノ暮と云ニ代

あけて妹はゆふへとみえて風のに送る霧の藤原

皇太后宮大夫俊成女

ふるさとや浅茅か原の夕霧にたちもかくれぬ小野の山

やかてふる寺は浅茅にはまつそあさ霧のふかけれはかくるとなし

藤原雅経

都をはあすの夕へとみゆれともききわたるらし人の秋のそらと

夕暮は霧のたちて物思ふ里にあはれはかゝる人をさそふと云ふ秀句也

宜秋門院丹後

草枕夕の空を我人とはなきてもつくる初かりのこゑ

藤原秀能

草まくら夕のとは枕をむすんて云秀句也

槙乃戸と

こゝ住ぬその山藤乃枕もる露やひとよのやとりには

有家朝臣

石清水の哥合ニ槙宿嵐と云ニ代

岩の戸の床に山嵐とふき払て独りや袖をぬらす中山

槙の哥とて

藤原業清

それかとも更科の夕へをあはれにてわかぬむかしの秋もかな

霧中ノ夕と云ふ山と

鴨長明

枕とてしらまの草に袖乃行そふかきの野への夕霧

東のそらかわるらんをすてゝもみねにこゝろ

[illegible]の草の[illegible]
長月(ナガ)のはつ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

氏部(うぢべ)の成範(なりのり)

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

禅性(ゼンシヤウ)法師

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

藤原秀能(ヒデヨシ)

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

摂政太政大臣家百首合[illegible]秋
[illegible]

藤原定家朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千五百番詩合[illegible]

藤原家隆朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

入唐求法巡礼行記　目録

巻第一　開成三年六月十三日従登州乗船発向新羅国
巻第二　開成四年正月一日於赤山院遥礼本国
巻第三　開成四年五月十六日従赤山院発向五台山
巻第四　開成四年五月廿六日従文登県青寧郷
巻第五　開成四年閏七月廿三日到五台山
巻第六　開成五年三月廿日従五台山発向長安
巻第七　開成五年四月十八日入京
巻第八　開成五年会昌元年
巻第九　会昌二年
巻第十　会昌三年
巻第十一　会昌四年
巻第十二　会昌五年
巻第十三　会昌六年
巻第十四　会昌七年
巻第十五　会昌八年
巻第十六　会昌九年
巻第十七　会昌九年
巻第十八　会昌九年
巻第十九　会昌九年
巻第二十　会昌九年



入唐求法巡礼行記　目録

巻第一　開成三年六月十三日従登州乗船発向新羅国
巻第二　開成四年正月一日於赤山院遥礼本国
巻第三　開成四年五月十六日従赤山院発向五台山
巻第四　開成四年五月廿六日従文登県青寧郷
巻第五　開成四年閏七月廿三日到五台山
巻第六　開成五年三月廿日従五台山発向長安
巻第七　開成五年四月十八日入京
巻第八　開成五年会昌元年
巻第九　会昌二年
巻第十　会昌三年
巻第十一　会昌四年
巻第十二　会昌五年
巻第十三　会昌六年
巻第十四　会昌七年
巻第十五　会昌八年
巻第十六　会昌九年
巻第十七　会昌九年
巻第十八　会昌九年
巻第十九　会昌九年
巻第二十　会昌九年

和哥ありてそのことを
しる

藤原定家朝臣

神さびけるその梢〻の景色
（この後てうくわうまでうつる）
詩と哥と合ひ
（ゴウ）

権中納言俊光

春の夕山路秋行くこころを

藤原定家朝臣

都よりやそうちの山々春霞
（カモノ）
鴨長明

神垣は月もれとやまとの下道
（ナガ）

源実朝

ゆく水と年のをしきは春の山

前大僧正慈圓

高山若木の神代の花の色
（ワカ）
（神代の人の神とも仰ぐるもしるきまでの事なれば）

百首歌たてまつりし時

従二位家隆

ゆく春の道こそなけれ白雲の
（ソラ）
たえまをつたふ山のかけはし

権中納言定家

春ごとに立ちかへりつつあすか川
（フチ）
あさきを渡る瀬をぞしらるる

従二位家隆

ふる雪のあとなきまでに春の海
（ソウク）
あけぼの渡る沖つ白波

右新古今集上一冊

学雅云

と御尋ニ候

義

以下全て白紙

新古今和歌集 上

新古今和歌集 上 一冊